

# 大学英語教育のあり方について

## ～一般学術目的の英語に焦点を当てた教材の作成を通して

中部大学 大門 正幸

### 0. はじめに

英語教育の在り方については、江利川 (2008)が丁寧に跡づけているように、明治以来、様々な議論がなされ、また数多くの試みが実践されてきた。本稿執筆時(2013 年)においても安部政権下の教育再生実行会議を中心に様々な議論・提言がなされており、大学における英語教育も議論の焦点のひとつである(cf. 教育再生実行会議(2013))。学術の中心という大学の位置づけを考えれば、教授の対象となるべき英語は学術目的の英語とするのが妥当だが、実際の教授内容については、様々な形が存在しうる。

本稿では、「一般学術目的の英語の教授」という観点から制作した、大学初年次教育用の教科書について、その成立の経緯と特色に関する報告を通して、大学英語教育における在り方について提言を行いたい。

### 1. 背景

まず、本稿で紹介する教材、*Discoveries: Strategies for Academic Reading* を制作することになった背景について、簡単に述べておきたい(より詳しい内容については、大門他(2010)を参照のこと)。

筆者が勤務する中部大学において、平成 23 年度の大幅なカリキュラム改訂の一環として、初年次の英語教育についても根本的な改革が議論された。学校教育法に規定された大学の役割 (= (1))、および勤務校が掲げる教育上の使命・理念 (= (2))を勘案した結果、「専門性の重視」を改革の基本方針とすることになった。

(1) 大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。(学校教育法第九章「大学」第八十三条, e-Gov より)

(2) a. 中部大学の教育上の使命:

豊かな教養とともに自立心と公益心をもち、広く国際的視野から物事を考え、専門的能力と実行力を備えた、信頼される人間を世に送り出す。

b. 中部大学の教育の理念:

本学の教育上の使命に沿い、それぞれの専門分野の基本的な考え方・知識・スキルとそれらを実社会で活用する能力、そして自ら学び続ける能力を身につけた、専門職業人/有識社会人となる人間を世に送り出す。

これは、大学における英語を、単なる(初等)中等・高等学校における一般目的の英語

(English for General Purposes, EGP)の延長線上にあるものとは捉えないということであり、その目指す所は、(3)のような、中学校や高等学校における目標とは異なるということである。

(3) a. 中学校学習指導要領「外国語」に記載された目標：

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。

b. 高等学校学習指導要領「外国語」に記載された目標：

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。

では、大学で教授すべき、専門性を重要視した英語とは何か。他の英語との関連で言えば、概念的には、学術目的の英語(English for Academic Purposes, EAP)、中でも初年次教育の段階においては、一般学術目的の英語(English for General Academic Purposes, EGAP)ということである(cf. 田地野・水光(2005)、Dudley-Evans and St John(1998)、Jordan(1997))。学術目的の英語の位置づけについては、図1に示す通りである。

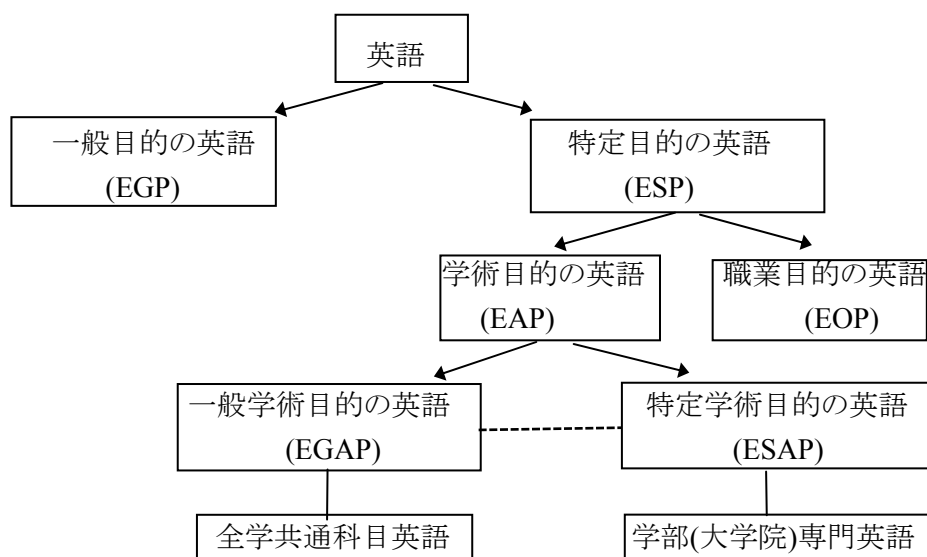


図1 大学英語教育目的の分類(竹蓋・水光編 (2005, p. 11))

[点線は連続体を表す]

## 2. 一般学術目的の英語の教授内容

様々な英語との関係で教授対象の英語がどのような位置を占めるかは明らかになったが、教授内容の具体化に際しては、様々な要因を勘案する必要がある。中でも授業時間数、クラスサイズ、受講生の学力は教授内容決定の際に最も重要となる要因である。

## 2.1 授業時間数・クラスサイズを考慮した絞り込み

学術目的の英語を教授する場合、その目標として、(i) 発信重視か受信重視かという観点と、(ii) 音声言語重視か書記言語重視かという観点から、表1に示した4つを考えることが出来る。

表1 目標の分類

	音声言語重視	書記言語重視
発信重視	授業での発表、学会での発表	レポートや論文の執筆
受信重視	授業の受講、聴衆としての学会参加	学術的な文書、論文の読解

この4つをバランスよく学習するのが望ましいことは言うまでもないが、授業時間数とクラスサイズ、さらに学部意向を勘案し、(i) 受信と(ii) 書記言語を重視した「学術的な文書、論文の読解」を目標とすることにした。

## 2.2 多様な受講生への対応

受講生の学力の多様性を考慮すると、学術的な文書や学術論文をそのまま教材とすることは難しい。(ただし、大門 (2010) で示したように、十分時間をかけることが出来れば、初級クラスの受講生を対象に学術誌 *Nature* に掲載された論文を教材とすることも可能である。)この点については、一般目的の英語(「一般英語」と略)と学術目的の英語(「学術英語」と略)の関係について記した図2を参考にするのが有意義であろう。

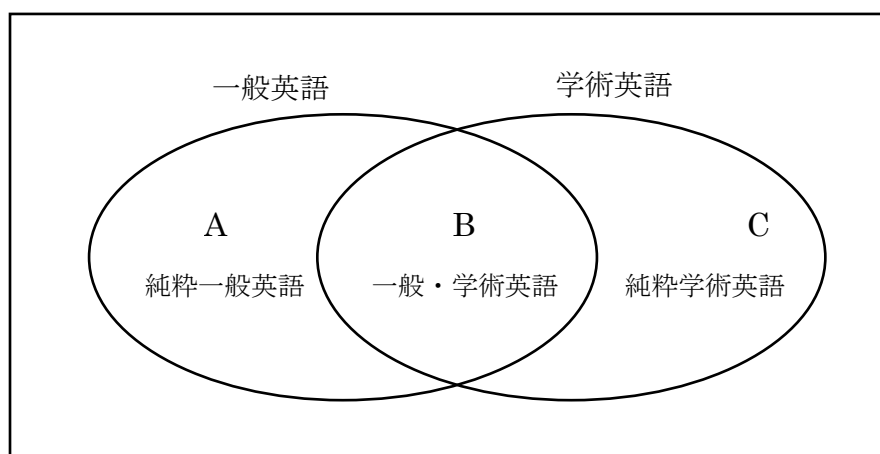


図2 一般目的の英語と学術目的の英語の関係

当然のことであるが、学術目的の英語は一般目的の英語と全く異なる訳ではなく、両者の間には相当重複する部分が存在する。学力が十分ではない受講生を対象とする場合には、学術目的の英語のみに特化した「C」の部分ではなく、両者の重なる「B」の部分に焦点を当てることによって、対応が可能となるであろう。この場合、重要なのは、学術目的の英語では使われ

ない「A」の部分と、両者が重なり合う「B」の部分の区別を意識し、「A」に焦点を当てないことである。

この点について、語彙を例に考えてみよう。  
 北村・田地野 (2008)、金丸・笹尾・田地野 (2009) は EGAP 教授のために、1,000 万語を越える学術論文データベースを作成し、学術分野で必要な 1110 語の選定を行っている。1110 語の内訳は、図3に示すように、文系・理系共通学術語彙(EGAP 語彙)447 語と文系共通学術語彙(EGAP-A 語彙)311 語、理系共通学術語彙 (EGAP-S 語彙)332 語から成る。なお、選出された語彙は、大学で学ぶための必須英単語集として、京都大学英語学術語彙研究グループ＋研究者編『京大学術語彙データベース 基本英単語 1110』という形で出版されている。

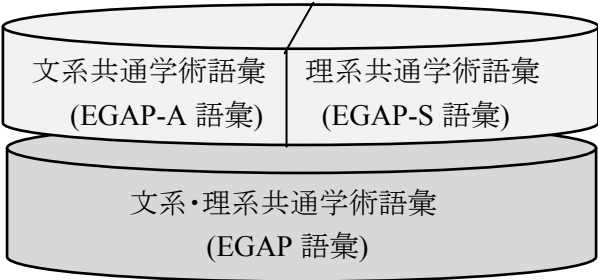


図3 学術語彙の構造

この学術語彙は、図2における「C」に焦点を当てたものである。  
 一方、筆者は、「B」に焦点を当てる立場から、Jacet 8000 と既存のコーパスを用いて独自の語彙リストを作成した。Jacet 8000 は、大学英語教育学会 (JACET) のプロジェクトチームが、1 億語の BNC(British National Corpus)、および日本人にとって重要度の高い英文データを集めたサブコーパスを徹底的に分析し、日本人が国際コミュニケーションを行う上で真に必要な語彙として 8000 語を選定したものである。今回、使用した既存のコーパスは、Brown Corpus (1960 年代のアメリカ英語)、LOB Corpus (1960 年代のイギリス英語)、Frown Corpus (1990 年代のアメリカ英語)、FLOB Corpus (1990 年代のイギリス英語)であり、それらの学術分野の文献を資料とした部分 (Learned and scientific writings) を分析の対象とした。  
 参考までに、4つのコーパスに含まれる資料のジャンル一覧を表2にあげる。

表2. Brown/LOB/Frown/FLOB Corpus のテキストカテゴリーとテキスト数

テキストカテゴリー		Brown	LOB
Informative Prose	A. Press: reportage	44	44
	B. Press: editorial	27	27
	C. Press: reviews	17	17
	D. Religion	17	17
	E. Skills, trades, and hobbies	36	38
	F. Popular lore	48	44
	G. Belles lettres, biography, essays	75	77

	H. Miscellaneous	30	30
	J. Learned and scientific writings	80	80
Imaginative Prose	K. General fiction	29	29
	L. Mystery and detective fiction	24	24
	M. Science fiction	6	6
	N. Adventure and western fiction	29	29
	P. Romance and love story	29	29
	R. Humour	9	9
合計		500	500

今回分析に使用したのは、この内の“J. Learned and scientific writings”の部分であり、そのさらなる内訳は、表3の通りである。

表3 Brown/LOB/Frown/FLOB Corpus における分析対象ファイル

	分類	ファイル数(番号)
文系	Social and Behavioral Sciences	14 (J22-35)
	Political Science, Law, Education	15 (J36-50)
	Humanities	18 (J51-68)
	合計	47
理系	Natural Sciences	12 (J1-12)
	Medicine	5 (J13-17)
	Mathematics	4 (J18-21)
	Technology and Engineering	12 (J69-80)
	合計	33

このようにしてファイルを抽出した結果、文系および理系の総語数はそれぞれ 382,686 語と 265,809 語、合計 648,495 語となった。

次に、文系・理系のそれぞれについて、Jacet 8000 と共通している語彙を抽出した。その結果は表4に示す通りである。なお、表4のレベルは、Jacet 8000 で規定されているものである(表5)。

表4 Brown/LOB/Frown/FLOB Corpus の学術部分と Jacet 8000 に共通する語彙

レベル	文系語彙	理系語彙	共通語彙
Level 1	985 (98.5%)	938 (93.8%)	933 (93.3%)
Level 2	945 (94.5%)	792 (79.2%)	762 (76.2%)
Level 3	817 (81.7%)	605 (60.5%)	528 (52.8%)
Level 4	911 (91.1%)	720 (72.0%)	686 (68.6%)
Level 5	772 (77.2%)	546 (54.6%)	452 (45.2%)
Level 6	649 (64.9%)	445 (44.5%)	330 (33.0%)

Level 7	609 (60.9%)	403 (40.3%)	277 (27.7%)
Level 8	513 (51.3%)	307 (30.7%)	210 (21.0%)

表5 Jacet 8000 における語彙レベル

レベル	対象・語彙内容・各種試験レベル
Level 1 [順位 1000 位まで]	中学校英語教科書に頻出する基本語。一般英文の 70% をカバー。
Level 2 [順位 1001~2000 位]	高校初級。英字新聞の 75% をカバー。英検準 2 級に相当。
Level 3 [順位 2001~3000 位]	高等学校英語教科書・大学入試センター試験は、ほぼこのレベルの単語で作成。英検 2 級に相当。社会人は教養として必要なレベル。
Level 4 [順位 3001~4000 位]	大学受験、大学一般教養初級。日本人が単語力の有無を問われるレベル。英検 2 級に相当。
Level 5 [順位 4001~5000 位]	難関大学受験、大学一般教養。英検準 1 級のレベル。TOEIC では、おおよそ 400 点から 500 点前後に相当。
Level 6 [順位 5001~6000 位]	英語専門外の大学生やビジネスマンが目標とするレベル。英検準 1 級、TOEIC では 600 点に相当。
Level 7 [順位 6001~7000 位]	英語専門の大学生、英語教師、仕事で英語を使うビジネスマンの到達目標。英検 1 級や TOEIC では 95% 以上の単語をカバー。
Level 8 [順位 7001~8000 位]	日本人英語学習者の最終目標。英語を仕事して使う場合、95% の単語を知っていることに。英検 1 級や TOEIC では 95% 以上の単語をカバー。

なお、表4におけるパーセントは、Jacet 8000 の各レベル 1,000 語とコーパスに登場する語との重複の割合を示したものである。

表4にリストされた語彙が図2の「B」に相当する部分であり、Jacet 8000 から表4の語を除いたものが図2の「A」に相当する。教授対象とするのは表3にリストされた語、すなわち、図2の「B」の部分ということになる。

例えば、procedure、reference、investigate、fucking、shit、pub のいずれも、Jacet 8000 では Level 4 の語として挙げられているが、最初の3語は図2の「B」に属するが、最後の3語は「A」に属する。fucking、shit、pub のいずれも、人生一般において重要な語であることは間違いなが、学術目的の英語を対象とした授業では教授対象語彙とはしないということである。

## 2.3 読解方略の重視

学術目的の英語を教授対象とする場合、読解方略(reading strategy)については明示的に教授することが有効であると思われる。読解方略は読解のみならず、レポートや論文の作成、口

頭発表など他の場でも重要な役割を果たす、母語、外国語を問わない重要な技術である。しかしながら、次の二つの理由で、特に英語の授業において取り扱うのが有効であると考えられる(もちろん、他の授業での教授を否定するわけではない)。

まず第一に、読解方略は、特に大学レベルの英語教育で古くから取り扱われてきた歴史があり、教授内容を熟知した教授者が多いため、教授効果も高いと考えられるからである。

二つ目の理由は、読解方略の一部(たとえば、シグナルワードや指示語など)は英語固有であり、英語を通して教授する他ない、ということである。

### 3. 学術目的の英語教授を目的とした教材

上記の理念・方針に沿った授業を展開するために、独自の教科書 *Discoveries: Strategies for Academic Reading* を作成・出版した(図4)。

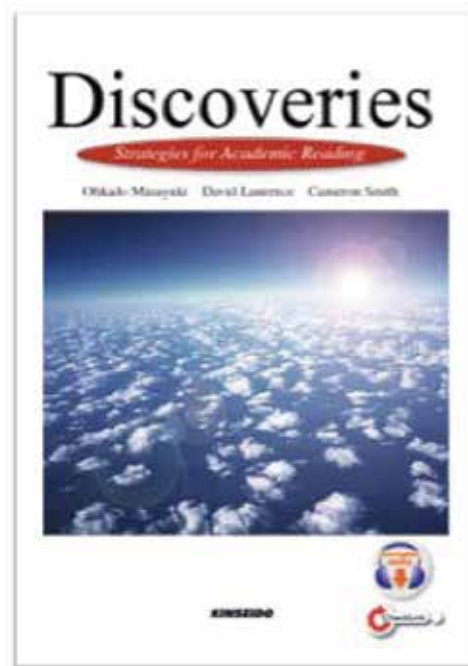


図4 学術目的の英語の教授という観点から作成した教科書

学術目的の英語の教授という観点から見た本書の特色は次の通りである。

- (A) 学術論文・学術書に基づいて書き下ろした英文を収録した。
- (B) 英文の原典となった論文、書籍を参考文献として明記した。
- (C) 同じテーマについて、初級・中級用の英文と、上級用の英文の2種類を用意した。
- (D) 英文とは別に、読解方略に関する説明の頁を設けた。

本書に収録した英文の題名と出典となった論文・研究書の学術分野は表6に示す通りである(ただし、学術分野の分類は大まかなものである)。

表6 各章の題名と学術分野

章	題名	学術分野
1	Playing Games to Manage Pain	医学
2	Which Name Should Come First, Family or Given?	文化学
3	Culturally-Colored Spectacles	心理学
4	Has the Internet Made Us Free?	社会学
5	Are You Misunderstood?	言語学
6	What Are Squid Doing in Space?	生物学
7	Where Is the Best Place to Live?	社会学
8	Strike While the Iron Is Hot	生理学
9	Is It a Good Idea to Ban Bottled Water?	人類学
10	Children Who Were Born Again	医学
11	If You Want to Live a Long Life	心理学・医学
12	How We Elect Our Leaders Matter	政治学

少し具体的に見てみよう。

たとえば、“If You Want to Live a Long Life” という題名の付けられた章では、長寿を研究テーマとした、長期に渡る大規模な調査の結果を題材としている。上級用の英文の最初のパラグラフと、初級・中級用の英文の最初のパラグラフは、それぞれ、(4a)と(4b)に示す通りである。

(4) a. 上級用の英文の最初のパラグラフ

What is the key to a long life? We are often told to pay attention to what we eat, to avoid stress, to get married, and to do some physical exercise. However, none of these are of central importance. This is what the most extensive study of longevity ever conducted in California has revealed.

b. 初級・中級用の英文の最初のパラグラフ

What is the key to a long life? Some say, “Pay attention to what you eat. Avoid stress. Do some physical exercise.” According to the most extensive study of longevity ever, none of these are of central importance.

それぞれの英文の総語数・総文数は、上級用が 500 語、38 文、初級・中級用が 313 語、27 文である。Microsoft Word の文章校正機能で Flesch-Reading Ease と Flesch Kincaid Grade Level を計算したところ、表7のようになった。



表7 初級・中級用の英文と上級用の英文の読みやすさの比較

	初級・中級用	上級用
Flesch Reading Ease	69.9	52.0
Flesch Kincaid Grade Level	6.3	9.2

Flesch Reading Ease では、初級・中級用の英文は 13~15 歳程度であれば簡単に理解できるレベル、上級用の英文は、理解には 15 歳~大学卒業程度の学力を要するレベルであると判定されている。また、Flesch Kincaid Grade Level では、前者は 11 歳程度、後者は 15 歳程度のレベルであると判定されている。

この章を執筆するにあたって参考にした文献は(5)に示す通りであり、これらはいずれも章の最後に掲載されている。

(5) a. Friedman, Howard S. and Leslie R. Martin (2011) *The Longevity Project:*

*Surprising Discoveries for Health and Long Life from the Landmark Eight-Decade Study.*  
New York: Hudson Street Press.

b. Martin, Leslie R., Howard S. Friedman, and Joseph E. Schwartz (2007)

“Personality and Mortality Risk across the Lifespan: The Importance of Conscientiousness as a Biological Attribute,” *Health Psychology* 26, pp. 428-436.

それぞれのレベルの英文で用いられている語彙と Jacet 8000 で挙げられている語彙との重複について、染谷泰正氏が提供している Word Level Checker(染谷 (2006))で分析したところ、表8と表9のようになった(ただし、Word Level Checker では固有名詞や don't、's を分析できないため、分析はこれらを除いた上で行ったものである)。

表8 上級用レベルの英文(11 章)の語彙分析

レベル	出現数	パーセント
1,000 語レベル	350	77.4%
2,000 語レベル	53	11.7%
3,000 語レベル	12	2.7%
4,000 語レベル	17	3.8%
5,000 語レベル	3	0.7%
8,000 語レベル	10	2.2%
Jacet 8000 以外	7	1.5%
合計	452	

\*Jacet 8000 以外の語: longevity, gifted, adulthood, behavior, belonging, accomplishment, towards

表9 初級・中級用レベルの英文(11章)の語彙分析

レベル	出現数	パーセント
1,000 語レベル	276	84.9%
2,000 語レベル	35	10.8%
3,000 語レベル	3	0.9%
4,000 語レベル	5	1.5%
5,000 語レベル	1	0.3%
8,000 語レベル	2	0.6%
Jacet 8000 以外	3	0.9%
合計	325	

\*Jacet 8000 以外の語: longevity, belonging, accomplishment

表8と表9から明らかなように、上級用では難易度の高い語が大きく増えている。Jacet 8000 に挙げられていない語についてであるが、表 10 に示すように、longevity を除き派生前の形、あるいは異形が全てリストされているので、実質的にはほとんど全ての語が Jacet 8000 に収録されている「一般・学術英語」(図2参照)の語彙であると言えるであろう。

表 10 Jacet 8000 以外の語の分析

Jacet 8000 以外の語	派生前の語／異形	語彙レベル
accomplishment	accomplish	5,000 語レベル
adulthood	adult	1,000 語レベル
behavior	behave	2,000 語レベル
belonging	belong	2,000 語レベル
gifted	gift	2,000 語レベル
towards	toward	1,000 語レベル

初級・中級用の英文と上級用の英文の両方を掲載し、さらに原典となった文献を記載することで、図5に示すような発展的な学習が可能になる。

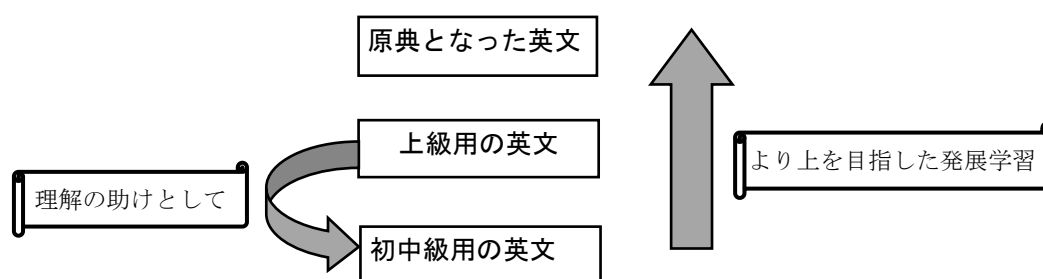


図5 二つのレベルの英文と原典を利用した多角的学習

すなわち、初級・中級者は上級用の英文に、上級者は原典となった英文に挑戦することでより

高度な英文に取り組むことが可能になる。また、上級用の英文を難しすぎると感じる上級者にとっては、中・初級用の英文を理解の助けとすることができる。なお、初・中級用の英文の理解が困難な場合には、現行では日本語訳に頼らざるを得ない(技術的には、さらに平易な英文を用意することも可能である)。

英文の原典を記載したのは、上記のような発展学習のためだけではない。

学術における言説は、なんらかの論理的な考察・調査・研究に基づいており、それが他者のものである場合には出典を明らかにするのが基本であるが、言語教育の教材については、それが適用されてこなかった。そのため、根拠のない言説を目にして閉口することも少なくない。たとえば、ある読解教材には、血液型をテーマにした(6)のような英文が掲載されている。

(6) All of the four blood types exist in Japan, whereas in Africa, almost all the people have type O blood.

しかし、出典が明記されていないためにこの教科書からだけでは、記載内容の事実関係を確認することができない。

世界における血液型の分布を示した Mourant et al. (1976)によれば、アフリカ諸国におけるO型の占める割合は50%~90%の間であり、(3)の内容は「誤り」と言っても過言ではない。

このような教材の氾濫に歯止めをかけるためにも、学術目的の英語に焦点を置くかどうかという議論とは独立に、言語教育の教材においても出典の明記を慣例にすべきであろう。

学術目的の英語という観点から見た本書の特色の4点目(= (D)英文とは別に、読解方略に関する説明の頁を設けた)について述べておこう。

今回作成した教科書では、読解用の英文とは独立に解説編を設け、受講生が自学できるように便宜を図った。解説編で扱った読解方略関連の内容は、(7)に示した通りである。

- (7) a. 文章の種類: 散文(情報散文・創作散文)・韻文
- b. パラグラフ構成: メインアイデア・トピックセンテンス
- c. 読む前の準備
- d. スキミング
- e. スキャニング
- f. 予測
- g. 推測
- h. 馴染みのない単語の意味の推測
- i. シグナルワード: 時系列・追加・比較対照・原因と結果・列挙・例示
- j. 指示語
- k. 代用
- l. 省略
- m. 繰り返し
- n. 視覚化
- o. 要約と再話

解説を一カ所にまとめることで、全体像の把握が容易になり、読解方略に対する理解が深まるのではないかと思う。

最後に、学術目的の英語に関する議論とは直接関係はないが、今回作成した教科書の音声面における特徴について述べておきたい。

言語教育において音声面の訓練が果たす役割については多くの研究が明らかにしているところである。たとえば、Suzuki (1999)は、リスニング訓練がリーディング能力に転移するという事実を、倉本・松村 (2001)および玉井 (2005)は、シャドウイングが(i) リスニング力、(ii) 復唱力、(iii) 記憶スパン、(iv) 構音(発音)速度、(v) 語彙力を向上させるのに有効であるという事実を指摘している。

しかしながら、受講生の多様な学力を考慮した場合、「標準的な速度」の朗読では、初級者には早すぎ、逆に上級者には遅すぎる、ということになりがちである。そこで、今回は、150WPM 程度の通常速度で本文を朗読した音声と、100WPM 程度の遅い速度で朗読した音声の2種類を用意した。また、ワールド・イングリッシュの観点から、それぞれについて、アメリカ英語による音声とイギリス英語による音声を用意した。まとめると、表 11 に示すように、一つの英文に対して、4種類の音声を用意したということである。

表 11 4種類の音声

アメリカ英語	通常速度(150WPM 程度)	遅い速度 (100WPM 程度)
イギリス英語	通常速度(150WPM 程度)	遅い速度 (100WPM 程度)

さらに、本文の途中から音声を聞きたい場合を考慮して、本文全体を朗読した「一括ファイル」に加えて、段落毎の「分割ファイル」を用意し、ホームページにアップロードした。図6は、その一部(11 章の「上級用」の英文用)である。



図6 音声ファイルへのリンク頁の一例

この章は7つのパラグラフから構成されているため、それぞれの段落のみを朗読した7つの音声ファイルと「章のみを朗読した音声ファイル」および「題名のみを朗読した音声ファイル」の合計9つの音声ファイルが用意されている。

なお、朗読の速度については、ピッチを変えることなく速度の調整ができる機能がブラウザレベルで標準に装備されるようになれば、複数の音声を準備する必要はなくなるであろう。また、ワールド・イングリッシュという観点からは、アメリカ英語とイギリス英語だけでなく、様々な英語による朗読が望ましいことは言うまでもない。

#### 4. まとめ

以上、本稿では、中部大学での実践を紹介しながら、大学における英語授業のあり方、特に学術目的の英語を教授する際の、教材のあり方について、(i) 一般目的の英語と学術目的の英語との関係を考慮し、現場の実情に合わせて「純粋学術英語」と「一般・学術英語」の配分を決定すべきこと、また、(ii) 教材の内容は信頼出来る原典に基づいた学術的なものとし、出典を明らかにすべきことを示した。

#### 参考文献

- 江利川春雄 (2008) 『日本人は英語をどう学んできたか: 英語教育の社会文化史』東京: 研究社.
- 江利川春雄 (2006) 『近代日本の英語科教育史—職業系諸学校による英語教育の大衆化過程』東京: 東信堂.
- 大門正幸 (2010) 『『全学英语教育科目で科学雑誌 Nature を読む』は可能か?』『中部大学教育研究』10, 99-103.
- 大門正幸・今村洋美・西村智・野田恵剛・山田伸明 (2010) 「大学英語教育に関する基本方針について—専門教育機関としての大学における英語教育の在り方を巡って—」『中部大学教育研究』10, 23-28.
- Ohkado, Masayuki, David Laurence, and Cameron Smith (2013) *Discoveries: Strategies for Academic Reading*. Tokyo: Kinseido.
- 大塚美輪 (2002) 「説明文における読解方略の構造」『教育心理学研究』50, pp. 152-162.
- 金丸敏幸・笹尾洋介・田地野彰 (2009) 「京都大学学術論文コーパスを用いた学術語彙リストの作成」『言語処理学会 第15回年次大会 発表論文集』, pp. 737-740.
- 北村隆行・田地野彰 (2008) 『平成19年度総長裁量経費プロジェクト「京都大学における英語の学術語彙データベースの構築—全学共通教育と専門教育との有機的連繋を目指して—」最終報告書』京都: 京都大学高等教育研究開発推進機構.
- 教育再生実行会議 (2013) 「これからの大学教育等の在り方について(第三次提言)」  
[http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaiei/pdf/dai3\\_1.pdf](http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaiei/pdf/dai3_1.pdf)
- 京都大学英語学術語彙研究グループ+研究者編 (2009) 『京大学術語彙データベース 基本英単語 1110』東京: 研究者.
- 倉本充子・松村優子 (2001) 「テキスト提示によるシャドウイングとリスニング力との関係」『外国語教育メディア学会第41回全国研究大会発表論文集』, pp. 239-242.
- Suzuki, Juichi (1999) “An Effective Method for Developing Student’s Listening

- Comprehension Ability and Their Reading Speed: An Empirical Study on the Effectiveness of Pauses in the Listening Materials,” Nicholas O. Jungheim and Peter Robinson (Eds.), *Pragmatics and Pedagogy: Proceedings of the 3rd Pacific Second Language Research Forum* Vol. 2, pp. 277-290, Tokyo: Pacific Second Language Research Forum.
- 染谷泰正 (2006) *Word Level Checker* (英語難易度解析プログラム)  
[http://www.someya-net.com/wlc/index\\_J.html](http://www.someya-net.com/wlc/index_J.html)
- 竹蓋幸生・水光雅則編 (2005) 『これからの大学英語教育』東京: 岩波書店.
- 田地野彰・水光雅則 (2005) 「大学英語教育への提言—カリキュラム開発へのシステムアプローチ—」竹蓋幸生・水光雅則編, pp. 1-46.
- 田地野彰 (2004) 「日本における大学英語教育の目的と目標について—ESP 研究からの示唆」『京都大学大学院人間・環境学研究科マルチメディア教育運営委員会 MM News』7, pp. 11-21.
- 玉井健 (2005) 『リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究』東京: 風間書房.
- 鳥飼玖美子 (2004) 「大学改革の哲学」『英語教育』53(4), pp. 8-11.
- 文部科学省「学習指導要領(中学校「外国語」)」 以下より 2013 年 10 月 28 日取得.  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/cs/1320124.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320124.htm)
- 文部科学省「学習指導要領(高等学校「外国語」)」 以下より 2013 年 10 月 28 日取得  
[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/cs/1320334.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/cs/1320334.htm)
- Mourant, Arthur, Ada C. Kopec, and Kazimiera Domaniewska-Sobczak (1976) *The Distribution of the Human Blood Groups and Other Polymorphisms*. London: Oxford University Press.

## **Perspectives on English Education at Universities, with Special Reference to Materials for Teaching “English for General Academic Purposes”**

Ohkado Masayuki

The teaching of English in Japan has long been a central topic of concern and as circumstantially traced by Erigawa (2006, 2008), there have been numerous discussions and practices since the Meiji period. Under the hosting of Prime Minister Abe Shizo, who lists rebuilding education as the top prioritized issue of Japan, the Education Rebuilding Implementation Council has been discussing and proposing various plans including English education at universities (cf. Education Rebuilding Implementation Council (2013)). Taking into consideration the role of a university as an academic institute, the natural conclusion drawn will be that the type of English focused on in university English education should be English for Academic Purposes (EAP).

In this paper, I will report on a textbook our team has created to teach English for first-year students with a focus on English for General Academic Purposes (EGAP) and clarify what conditions are required for materials for teaching English for academic purposes at universities.